

# 大学初年次教育科目における社会的動機づけに関する検討

中西 良文<sup>1,2</sup>・中島 誠<sup>2</sup>・下村 智子<sup>2</sup>・守山紗弥加<sup>2</sup>  
長濱 文与<sup>2</sup>・大道 一弘<sup>3</sup>・益川 優子<sup>4</sup>

**Social Motivation in the “First Year Seminar” for Undergraduate Students.**

**Yoshifumi NAKANISHI, Makoto NAKAJIMA, Tomoko SHIMOMURA,  
Sayaka MORIYAMA, Fumiyo NAGAHAMA, Kazuhiro DAIDOH and Yuko MASUKAWA**

## 要 旨

本研究では、協同学習によって進められている大学初年次教育科目において、協同学習における社会的動機づけがどのように変化するか、また、その中で協同学習における社会的動機づけが大学適応感とどのように関連するかについて検討を行った。大学初年次教育科目を受講する大学1年生1066名を対象に、全15回授業の中で、初回授業(4月中旬)ならびに、第14回授業(7月中旬)において質問紙調査を行った。社会的動機づけについては、「メンバーからの被評価動機」において有意な得点の上昇が、「他者援助動機」「他者からの知識影響に対する動機」において有意な得点の下降が見られた。また、第14回授業における大学適応感を従属変数、社会的動機づけの各下位尺度得点を独立変数とした重回帰分析を行った結果、対人的適応感、学業的適応感ともに、「他者からの刺激による動機づけ」「他者からの知識影響に対する動機」が正の予測を示した一方、「メンバーからの被嫌悪回避動機」は負の予測を示した。

## 【問題と目的】

近年の協同による学習に対する教育場面での関心が高まる中で、協同学習によって動機づけが高まることへの期待も大きいといえる。協同学習過程においては、個人で学習を進める場合と同様に、学習者は特定の動機づけをもって学習に関わっていると考えられる。しかし、そのような協同学習過程においては、個人で学習を進める際とは異なり、動機づけに対して社会的な関わりの影響を何らかの形で受けていると考えられる。すなわち、協同学習において社会的な動機づけが刺激されることが予想される。

このような観点から、中西・中島・大道・益川・守山・下村・長濱・中山(2014)は協同学習場面における社会的動機づけ尺度の作成を試みた。そして、そこでの検討を通して、「他者からの刺激による動機づけ」「他者援助動機」「メンバーからの被評価動機」「メン

バーからの被嫌悪回避動機」「グループに対する被評価動機」「他者からの知識影響に対する動機」の6下位尺度からなる尺度を作成した。

本研究では、これらの尺度を用いて、実際の協同学習場面で社会的動機づけがどのように変化するかについて検討することを第1の目的とする。

協同学習場面においては、グループメンバーという他者との関わりを密接に行いながら学習を進め、また、その密接さの度合いは回を重ねるごとに強くなると考えられるため、他者の頑張る姿に触発されて頑張ろうという動機や他者を助けたいという動機、メンバーから評価されたいという動機や他者と関わる中で新たな知識を得たいという動機が高まると考えられる。また、グループとしての一体感も生まれてくることによって、グループ全体として高い評価を受けるために頑張りたいという動機も高まると予想される。一方で、メンバー間の関係性が深まるにつれて、メンバーから嫌われな

1 三重大学教育学部

2 三重大学高等教育創造開発センター

3 早稲田大学

4 愛知学泉大学現代マネジメント学部

いように頑張ろうという動機は低下すると考えられる。本研究ではこれらの動機づけに関する変化が協同学習を実際に行う中で見られるかについて検討を行う。

本研究で取り上げる協同学習の実践としては、著者らが所属する三重大学で行われている初年次教育科目『「4つの力」スタートアップセミナー』に着目する。このプログラムは大学の教育目標として育成が掲げられている「感じる力」「考える力」「コミュニケーション力」「生きる力」の4つの力を中心に扱った初年次教育科目であり、全学統一プログラムとして展開している（プログラムの詳細は、中山・長濱・中島・中西・南（2010）および中山・中島・長濱・中西・南（2013）を参照）。このプログラムの1つの特徴として、プロジェクト活動を中心とした協同学習を進めていくことにより、教育目標に掲げられている4つの力の内容やその活用について体験的に学べるということが挙げられる。このようなプロジェクト活動を中心とした協同学習の中で、学生は他の受講生と関わりながら学習を進めていく。そのため、学生の動機づけは、他の受講生との関わりの中で、前述のような変化をしていくと考えられる。本研究では、この実践を取り上げ、そこでの社会的動機づけの変化について検討を進める。

ところで、協同学習によって社会的動機づけに何かしらの変化が見られた場合、それが実際の学習行動など別の側面にも影響することが考えられる。本研究で取り上げる実践は、初年次教育の科目であるが、そこでの1つのねらいとして、大学への適応といったものも掲げられる。実際、長濱・中島・中山・中西（2010）では、この初年次教育科目の受講によって対人関係に対する適応感が高まることが明らかとなっている。このような適応という側面に対しても協同学習における社会的動機づけは、そこでの活動の成果を媒介して、何らかの影響を与えると考えられる。そこで、本研究の第2の目的として、協同学習実践の終了時において、協同学習における社会的動機づけが大学適応にどのような関連を示すのかについて検討を行う。これによって、どのような社会的動機づけの側面が適応を促すかについて明らかになると考えられる。

## 【方法】

**対象** 2013年度「4つの力」スタートアップセミナーを必修科目として共通プログラムによる授業を受講していた大学1年生1066名（男性681名、女性385名）。受講生は所属コースに応じた約40名のクラスに分かれて受講したが、そこで用いられるテキスト（中山・中島・下村・大道・益川・守山・高山・中西・山田・長濱，2013）は共通のものであり、また、授業担当者

表1 「4つの力」スタートアップセミナーにおける各回の授業内容

回	テーマ
1	導入、大学での学び
2	グループ活動の基本
3	アイデアの発想
4	テーマの設定
5	情報の種類と特徴
6	計画の立て方
7	情報収集における手順とマナー
8	プロジェクトのピアレビュー
9	情報の吟味
10	レポートの作成
11	発表の方法
12・13	プロジェクト発表と評価
14	プロジェクトのふり返り
15	全体のふり返り

も同一の授業案に沿って授業を実施していた。

**実践の概要** 2013年度「4つの力」スタートアップセミナーは表1のようなプログラムによって全15回の授業で行われた（なお、「4つの力」スタートアップセミナーにおける授業デザインの思想や開講の背景については、中山・長濱・中島・中西・南（2010）に詳しい）。15回の授業を通し、基本的には4名グループ（一部5名グループあり）によって学習が進められた。なお、途中でグループのメンバー変更は行われなかった。また、第3回目の授業でプロジェクトテーマが提示され、第14回目の授業までプロジェクト活動を中心として学習活動が進められた。表1に示されている授業内容は、このプロジェクト達成に関わる各要素をその時点で学ぶという観点から構成されている。さらに、これらの要素は大学教育目標である「4つの力」とも対応づけられ、授業の中で強調された。

**調査実施方法および実施時期** 質問紙を授業で一斉配布し、次の授業までに回答して、次の授業時に提出してもらう、一斉配布・持ち帰り回答形式で行った。授業開始時の調査は、初回授業（4月中旬）で配布、授業終了時の調査は第14回授業（7月中旬）で配布した。

**質問紙** 協同学習における社会的動機づけ尺度（中西ら，2014）：協同学習における社会的動機づけを5段階評定で問う27項目。他者の行動に触発されて行動を行うという「他者からの触発による動機づけ」、他者に援助を行いたいという「他者援助動機」、グループの他のメンバーから評価を受けたいという「メンバーからの被評価動機」、グループの他のメンバーから嫌われたくないという「メンバーからの被嫌悪回避動機」、

表2 授業開始時（初回）と授業終了時（第14回）における社会的動機づけ尺度の平均値・SD

	授業開始時（初回）		授業終了時（第14回）			
	N	平均値	SD	平均値		SD
他者からの触発による動機づけ	778	4.017	.634	3.975	.679	
他者援助動機	767	4.003	.556	3.942	.601	**
メンバーからの被評価動機	775	3.316	.739	3.416	.732	***
メンバーからの被嫌悪回避動機	778	3.254	.840	3.232	.809	
グループに対する被評価動機	778	3.922	.622	3.914	.656	
他者からの知識影響に対する動機	766	3.883	.677	3.666	.736	***

\*\*：  $p < .01$ , \*\*\*：  $p < .001$

グループ全体として良い評価を受けたいという「グループに対する被評価動機」、他者から新たな知識を得たいという「他者からの知識影響に対する動機」のそれぞれを測定する6下位尺度からなる。

大学への適応感：出口・吉田（2005）で作成されている対人関係に対する適応感6項目ならびに学業に対する適応感5項目からなる大学への適応感尺度11項目を用いた。

なお、質問紙ではこれらの尺度の他に、別の複数の尺度についても回答を求めたが、本研究での検討では扱わない。

### 【結果と考察】

**社会的動機づけの変化** 協同学習における社会的動機づけ尺度の6下位尺度それぞれについて、対応のあるt検定を行った（表2参照）。その結果、「メンバーからの被評価動機」において有意な得点の上昇が見られ（ $t(774) = 3.913$ ;  $p < .001$ ）、また、「他者援助動機」「他者からの知識影響に対する動機」において有意な得点の下降が見られた（他者援助:  $t(766) = 2.888$ ;  $p < .01$ , 他者からの知識影響:  $t(765) = 8.484$ ;  $p < .001$ ）。

これらの結果について、まず、グループの他のメンバーから評価を受けたいという「メンバーからの被評価動機」においては、グループでの活動が進むにつれ、他のメンバーとの関わりが深くなっていき、そのため、「評価されたい」と感じるように他のメンバーの存在が変わっていったことや、授業終了時にはそこまでの活動において頑張ってきた活動があるため、その頑張りを認められたいという気持ちが強くなったことが考えられる。一方で、グループの他のメンバーから嫌われたくないという「メンバーからの被嫌悪回避動機」については、有意な変化が見られなかったため、メンバーから評価を受けたいという気持ちは前向きのものであったと考えられる。

「他者援助動機」および「他者からの知識影響に対する動機」は、本来、グループ活動の終了時に向けて上昇が期待される項目であったが、低下するという結

果が見られた。「他者援助動機」については、メンバーの成長が見られたため、援助を行う機会や重要性が下がっていったという可能性が考えられる。「他者からの知識影響に対する動機」については、長くグループ活動を行うことで他者のことがよく分かるようになり、他者から得られる知識に新鮮味がなくなったことや、他者から知識を得られるということそのものがありふれたものになり、そういったものを得たいという感覚が薄れていったのかもしれない。これら得点の下降が見られた項目も本来、上昇が期待される項目であったため、これらがなぜ下降したかについて、より詳しいプロセスが分かるように検討を深めるとともに、これらの得点が授業終了時に上昇するような協同学習実践のあり方について検討する必要がある。

**協同学習における社会的動機づけが大学適応に及ぼす影響** 協同学習における社会的動機づけが大学適応にどのような影響を及ぼすかを検討するために、一連の協同学習が終わったところである第14回授業における「大学への適応感尺度」の2つの下位尺度（対人関係に対する適応感・学業に対する適応感）を従属変数、同じく第14回授業における「協同学習における社会的動機づけ尺度」の各下位尺度得点を独立変数とした重回帰分析を行ったところ表3に示されるような結果が得られた（なお、ここでの分析では、それぞれを従属変数とした分析においてデータがそろっているものを全て用いた）。

その結果、対人関係に対する適応感、学業に対する適応感ともに、「他者からの刺激による動機づけ」「他者からの知識影響に対する動機」からの有意な正の標準偏回帰係数が見られた一方、「メンバーからの被嫌悪回避動機」からは有意な負の標準偏回帰係数が見られた。また、学業に対する適応感に対しては、「他者援助動機」「グループに対する被評価動機」からも有意な正の標準偏回帰係数が見られた。

これらの結果から、まず、「他者からの刺激による動機づけ」「他者からの知識影響に対する動機」が対人関係・学業の両方の適応感を正に予測していることが示され、このことから他者が頑張っている姿に触発

表 3 第14回における大学適応感を従属変数とした重回帰分析結果

	対人関係に対する 適応感 ( $\beta$ )	学業に対する 適応感 ( $\beta$ )
F 1. 他者からの刺激による動機づけ	.185**	.137*
F 2. 他者援助動機	.088	.137*
F 3. メンバーからの被評価動機	.062	-.050
F 4. メンバーからの被嫌悪回避動機	-.117**	-.149***
F 5. グループに対する被評価動機	.051	.114*
F 6. 他者からの知識影響に対する動機	.158**	.179***
	R <sup>2</sup>	.202
	N	943
		.216
		944

第14回の社会的動機づけにおける6下位尺度を独立変数として投入

され自分も頑張ろうと考える動機や他者から新たな知識を得たいからがんばろうという動機は、適応感とつながっていることが考えられる。一方、「メンバーからの被嫌悪回避動機」は対人関係・学業の両方の適応感を負に予測していることが示され、メンバーから嫌われないようがんばろうという動機を持つことは適応感を阻害する可能性が示唆される。また、「他者援助動機」「グループに対する被評価動機」は学業に対する適応感を正に予測していたが、このような動機を持つことはグループの活動を活性化すると予想され、それが学業的な達成につながり、学業的な適応感につながった可能性が考えられる。

これらのことから、適応感を促すことを視野に入れた協同学習の支援を考えるならば、他者の頑張っている姿に触発されるようにし、他者から新たな知識を得ようとすることを促しながら、他者から嫌われないようにという意識を低減させられるような支援を行うことで、対人関係・学業の両方の適応感を促すことにつながられるかもしれない。また、他者を助け、グループ全体で評価されようとすることを促すことで、学業的な適応感を高めることにつながるかもしれない。

### 【今後の展望】

本研究では、協同学習を取り入れた初年次教育科目である「4つの力」スタートアップセミナーにおいて、協同学習に対する社会的動機づけがどう変化するか、また、授業終了時のそれらが大学適応とどのように関わっているかについて検討を行った。

ただ、今回の結果は授業での2時点の質問紙調査によるものであるため、ここで見られた変化や関連が、具体的にどのような学習活動や学習中の個人の経験によるものかについて、十分な検討ができていない状態である。そのため、今後、それらに目を向けた検討を進めていくとともに、これらの動機をより望ましい方向に導くことができる協同学習のデザインを検討して

いく必要があるといえる。

### 【引用文献】

- 出口拓彦・吉田俊和 2005 大学の授業における私語の頻度と規範意識・個人特性との関連：大学生活への適応という観点からの検討 社会心理学研究, 21, 160-169.
- 長濱文与・中島誠・中山留美子・中西良文 2010 学士力に対応した全学的初年次教育の展開③-授業導入による大学生の適応、社会的スキルの変化の検討- 第16回大学教育研究フォーラム発表論文集, 50-51.
- 中西良文・中島誠・大道一弘・益川優子・守山紗弥加・下村智子・長濱文与・中山留美子 2014 協同学習場面における社会的動機づけ尺度作成の試み 三重大学教育学部紀要 65, 335-341.
- 中山留美子・長濱文与・中島誠・中西良文・南学 2010 大学教育目標の達成を目指す全学的初年次教育の導入 京都大学高等教育研究, 16, 37-48.
- 中山留美子・中島誠・長濱文与・中西良文・南学 2013 学士力に対応した全学的初年次教育の展開⑩ -4年間の取り組みに関する横断的検討- 第19回大学教育研究フォーラム発表論文集, 196-197.
- 中山留美子・中島誠・下村智子・大道一弘・益川優子・守山紗弥加・高山進・中西良文・山田康彦・長濱文与(編) 2013 三重大学「4つの力」スタートアップセミナー 2013年度版 ムイスリ出版

### 【付記】

本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金の補助を受けて行われたものである。また、本研究で用いたデータの一部は、中西・中島・大道・益川・守山・下村・長濱・中山(2014)での検討にも用いられている。